特別レポート

2011夏 教師も高校生も議論し始めた

高校を超えて いま話し合うべきこと

Discussion Report!!

3.11を経て、「つながり」「絆」というキーワードが社会に行きかうようになりました。今年の夏には新たな問題意識のもと、高校教師や高校生が主体となって、自分が所属する高校を超えた「議論の場」を生み出しています。ここではそんな新しい3つの議論の場を取り上げ、どうしてその場が実現されたのか、何がそこで語られたのかをレポートします。

取材・文／堀水潤一（32〜35P）　平井美里（36〜38P）　荒尾貴正（39P）

Report 01

全国から44人の熱い教師が結集「連携で広がる進路指導の可能性」

第1回進路指導研究会 in 小田原箱根
全国連携「チームNIPPON」をめざして

Report 02

全国初の高校生によるリアル熟議「高校生が考える自分たちのこと」

招待会議2011 at 慶應義塾高校

Report 03

被災地の高校生115人からのメッセージ「未来への決意」

「未来への願いを学ぶ意欲へ」仙台学習意欲シンポジウム

Report 01

全国から44人の熱い教師が結集「連携で広がる進路指導の可能性」

第1回進路指導研究会 in 小田原箱根　全国連携「チームNIPPON」をめざして

全国から参集した進路指導のリーダー

8月6日、猛暑のつづく箱根（神奈川県）に、全国から熱い教師が集まった。「第1回進路指導研究会in小田原箱根」の参加者だ。発起人は、今春、神奈川県立茅ケ崎西浜高校に赴任した神戸秀巳校長。「元気と夢は感染する！」「想いは手法の上流にあり」などの声も高らかに、プラス思考を地でいく熱血校長である。

神戸校長は、「全国連携〝チームNIPPON〟をめざして」と副題のついた研究会の趣旨を次のように説明する。

「最大の目的は、震災後の進路指導のあり方を含め、高校の連携を深め、志を共有すること。点を線に結び、未来につないでいくことです。もう一つの目的は、地域の活性化、教育力の向上を目指すこと。地域の教育と行政と産業が未来を見通して手を携えたとき、何らかの力が生まれるはずです。どうしたらそれを有効なものにできるかを探りたい。今回は神奈川県西部版ですが、今後、各地で同じような取り組みをし、有効な手段がみつかれば情報を共有していきたいと思います」

進路指導というくくりはあるが、大きな視野で日本の教育を見つめ直したいという思いが神戸校長にはある。呼びかけに応じた教員は、岩手県から島根県まで25校44人。無名の一公立高校が主催した私的な研究会ということを考えると大変な規模だ。多くは、神戸が交流を深めてきた教員であり、また、会の精神的支柱ともいえ、「岩手県北沿岸5校会議」など、進路指導における地域ネットワークの仕掛け人としても知られる花巻東高校の村上育朗教頭を慕う教員だ。各県における進路指導のリーダー的存在が多く、互いに気脈を通じている様子だが、なかにはホームページの告知だけを頼りにやってきた若い教員もいた。会場は、こうした向上心にあふれる若手、中堅からベテランまで幅広い層で埋めつくされた。

Outline

【主催】
神奈川県立茅ケ崎西浜高校

【日程】
2011年8月6～7日　箱根湯本 ホテルおかだ

【プログラム】
1日目：講演『行政の長の立場から教育に期待すること』加藤憲一氏（神奈川県小田原市市長）
講演『地域振興と社会活性化の観点から教育に期待すること』鈴木悌介氏（小田原箱根商工会議所副会頭）
講演『「考えること」と「感じること」』村上育朗先生（岩手・私立花巻東高校教頭）
2日目：講演『学会と高校の連携の拓く未来』小粥幹夫氏（東北大学特任教授）
発表:各校による進路指導、地域連携、震災対応をテーマにした実践発表
講演『東日本大震災から学んだこと』（一般公開）村上育朗先生

【参加校】
岩手・花巻東高校、山形・酒田東高校、鶴岡中央高校、宮城・白石高校、気仙沼高校、福島・福島高校、会津高校、埼玉・本庄北高校、越谷北高校、神奈川・弥栄高校、茅ケ崎西浜高校、新潟・高田高校、国際情報高校、富山・南砺総合井波高校、長野・屋代高校、静岡・沼津東高校、岐阜・岐阜北高校、桜ヶ丘中学校、三重・上野高校、伊勢高校、岡山・精思高校、広島・広島国泰寺高校、島根・横田高校、隠岐高校、三刀屋高校、ほか教育委員会、大学教授、町議会議員　25校。教員44人

【URL】http://www.chigasakinishihama-h.pen-kanagawa.ed.jp/2011sinro/

これからは心の時代。いかにつながるか、つなげていくか。

思いをもつ者には出会いが訪れる。それが形になるとネットワークになる。

深夜までつづいた意見交換

初日はまず、地元自治体トップおよび経済界の代表が登壇。地域振興や人材育成について大所高所から語られた。

「日本の再生は地域にかかっている。〝脱・向都離村〟。新しい公共の担い手を地域で育てたい。地域における人づくりのニーズと、学校側での人づくりの取り組みをうまくマッチングできれば、地域からの日本再生につながると期待している」(小田原市長・加藤憲一氏)

「中央集権的なシステムに加え、それを補完する分散型のシステムが不可欠。画一化、均一化による恩恵は大きいが、地域の文化や食や技、人のつながりなど軽んじられたものも多い」

「どうしたら生き残れるかではなく、どのような社会にしたいかというビジョンを語るべきとき。変化に対応するより、変化を起こせる会社でありたい」(小田原箱根商工会議所副会頭・鈴木悌介氏)

続く村上先生の講演では、自らの被災体験から生まれた教訓をはじめ、あいさつなど凡事を徹底することの大切さ、教えすぎる教育の弊害などが力説された。

夕食時からは一転、和やかな雰囲気のなかで意見交換が行われる。各県代表者によるあいさつの際には、急逝した石川一男先生(酒田東高校)を偲ぶ声や、地元の窮状を訴える声など、ときおり感極まる様子も見られた。意見交換はその後、各部屋に舞台を移して続行。「うまくいっている学校は必ず飲み会がある」という村上先生の持論を体現するように、口角泡を飛ばす議論は深夜まで続いた。

情熱が伝播した2日間

2日めは、「学会と高校の連携の拓く未来」と題した東北大学特任教授、小粥幹夫氏による講演に続き、進路指導・地域連携・震災対応をテーマに、6つの高校から事例報告が行われた(発表事例1～3参照)。

各校からはこのほか、地域活性化の取り組みや、中学校における生徒指導の現状、行政の立場からみた地域ネットワークなどの報告があった。

続いて行われたのが、全参加者によるスピーチだ。一人ひとりの持ち時間は短かったが、大変熱を帯びたものになった。少

発表事例1

進路指導ネットワークづくりで大切にしてきたこと

三重県立上野高校
教頭
松岡泰之先生

三重県には、進路指導に関するネットワークが複数あります。1つめは「進学12校会」。進学校における進路指導主事の集まりです。2つめは、2007年度から始まった「難関大セミナー運営」。進学12校会の各校から講師をだしあい「東大講座」「名大講座」などを共同開催するものです。三重は大きな県ではありません。そのようななか、「自分の学校さえよければいいのか」「志ある生徒は県全体で育てよう」という教員の意識の高まりのなかで始まったものです。09年度からは県教委主催で「医学部等進学対策講座」と名称を変えて実施しています。このセミナーは、教員の指導力向上につながっているばかりか、参加する各校の若手・中堅教員に対して、「こんなすごい先生が県内にいたのか」といった刺激を与える目的ももっています。

ネットワークづくりを通して私が大切にしたいのはまさにそこ。若い教員には、県内外で活躍されている先生方に会い、そのオーラを直に感じてほしいのです。注目されている学校には必ず誰かがいます。講演を聞くだけではなく、ペーパーを読むだけでもなく、直接、話をしてください。研究会のあとに懇親会が催されるならば、こんなチャンスはないとばかりにぜひ参加してほしい。日常業務が多少忙しかろうと、出会いを最優先に考えられる。そんな若い教員を育てたいと思います。

このほか三重県のネットワークとしては、県内各地から30人近くが集うこともある「村上育朗先生を囲む会」や、「進学12校教頭会」「進学12校会OB会」など、非公式なものもあります。

ネットワークのいいところは新しい世界に触れられることです。先日、野球部の顧問をしている同僚がこんな話をしていました。

「県のベスト4に進んだことで、甲子園常連校の監督も参加するような会に初めて招かれた。そこで驚いたことがある。その会では、誰も野球の戦術の話などしない。そのかわり、どういう人間を育てたいかという話題に終始していた。自分は、ステージがひとつあがった気がした」

私は、進路指導もスポーツの世界も同じだなと強く思いました。

発表事例2

フクシマと呼ばれることになって

福島県立福島高校
進路指導部副部長
浜田伸一先生

震災直後より、さまざまな方から励ましのメールやお手紙をいただきました。この場を借りてお礼を申し上げるとともに、当時やりとりしたメールの一部を紹介させていただきます。

「略。私も昨日、高校入試の合格発表業務を終えひと区切りつきました。厳しい状況ながら合格をよろこぶ生徒の姿を見るにつけ、この子たちに、われわれがどこで誤ったのかをきちんと伝え、新たな日本のシステムを構築してくれる“ひと”を育てる教育の役割を痛感しました。このような事態を引き起こすもとを容認し、許容していたことを痛感しました。1県民として、これからそのことに全力で取り組むことが責務だと自覚しました。核廃絶を強く望みながら、福島が現代におけるヒロシマ、ナガサキになってしまったことが本当に悔しいです。だからこそ、福島の教育は負けられません」

このころは本当に緊迫した状況でした。原発が水素爆発を起こし、放射線量が20マイクロシーベルト（μSv/h）くらいのときのことです。それが5カ月経ち、だんだんと薄れてしまっている自分がいます。今回、多くの方から「大変ですね」というお言葉をいただきましたが、そんな言葉でもない限り、県内にいると感覚が麻痺してしまうのです。今、読み返してみると気恥ずかしささえ感じますが、あのときの思いを忘れてはならないと思っています。

震災後、最初に生徒の顔を見たのは4月12、13日のことです。校舎が半壊したため、教室の移動をしようということで、ホームページを通じて生徒にもその手伝いを呼びかけました。余震が続くなかの作業であるためとても心配しましたが、当日は200人の生徒が集まってくれました。

始業式以降も、困難ななか生徒はよくやってくれました。勉学に励み、社会貢献のために自分を高めていくという校風が染みついていたからでしょう。そういう意味で在校生には期待していましたが、新入生にはそうはいきません。そのため進路指導部や各教科の先生が「困難ななかしっかりやっていくことが将来につながる」という話を繰り返しされました。心配する保護者の方々には、「本校には、こうした状況でもやれる生徒たちが集まっているから大丈夫です」と伝え、理解をいただきました。

そうやって生徒は頑張れるのですが、放射能に関しては難しい問題があり、生徒の安全を確保することを最優先にしていました。県の調査ではグラウンドが3.1μSv/hという報告を受けていましたが、詳細は伝わらず、われわれも生徒も、本当に大丈夫なのかという疑問をもちました。そんななか、「福高グラウンドスキャン作戦」と題して、SSHの生徒と教職員がグラウンドの660地点を実際に測定したのです。すると、体育館の側溝が60μSv/hになっていることがわかり、すぐに立ち入り禁止にしました。行政に何とかしてほしいという思いはありましたが、自分たちでやれることをやろうというスタンスが学校にあふれていました。自分の置かれた状況と向き合い、今、何をすべきか、何ができるかを考え、自主的に行動したのです。今までの進路指導は、自分は「何がしたいか」というところから始まることが多かったと思いますが、自分は「何をすべきか」「何ができるか」という価値観に変わり始めてきたともいえます。

7月26日には、総合的な学習の時間に全生徒を体育館に集め、理科の各先生が、放射線の影響の話をしました。何が正しいのかはわれわれにもわかりません。けれど、情報をきちんととらえ、自分で判断する力をつけるという意味では、大変いい機会になりました。

最後に、県内の状況をお伝えします。6月1日時点で高校だけで1035人が、小・中学校を合わせるとすでに8363人が県外に転校しています。進路指導部としては、地元の復興に携わる人材を育てたいのですが、ある調査によると地域外、県外の就職を希望する生徒が昨年より7％増えたといいます。特に原発の被害があった地域は48％の高校生が県外の就職を希望しているそうです。地元に職がないので県外に行かざるを得ない状況です。そうしたことから考えても、この研究会のテーマの一つである「地域の連携」は、今後、とても大事な課題になると痛感しています。

「福高グラウンドスキャン作戦」は校内新聞やSSH通信で詳報されたほか、全国紙にも取り上げられた。

し長いが、要約して紹介する。

「出会いを出会いのまま終わらせるのではなく、風にしたい」「できない理由を考えるより、できる方法を考える」「進路指導は生き方の指導という思いを新たにした」「わが県はいまだに鎖国。外に目を向けねば」「生徒の人生に携われる仕事をして本望」「われわれの世界も捨てたものではな

明日とはいわず
今日から気合いを入れる

研究会は、本校職員の視野を広げ、意識を高めた。積極的な教育活動として生徒に還元したい。

神奈川県立茅ケ崎西浜高校
校長
神戸秀巳先生

震災では普通のことが普通でなくなり、普通でないことが普通になった。日本人のあり方、生き方を変えた。

岩手県・私立花巻東高校
教頭
村上育朗先生

発表事例3

現実に向き合うこれからが勝負

宮城県気仙沼高校
進路指導部部長
佐藤忠司先生

言葉が先行し、復興しているというイメージがあるようですが、私どもの学校がある気仙沼の市街地はまったく回復していません。電気もいまだに不通です。瓦礫の撤去率は50%ぐらいで、夜間立ち入り禁止区域にはパトカーが常駐している状態です。市内の空いている平地はほとんど仮設住宅になりました。市営グラウンドも、マウンドを含め内外野すべてが仮設で埋まっています。2年はこの状況が続くかと思うと、野球好きの先生は涙がでてくることでしょう。

本校は、施設こそ軽微な被害で済みましたが、全日制生徒の罹災率は39.8%にのぼります。もともと気仙沼は交通の便がよくないのですが、JR気仙沼線は完全に損壊し、国道45号線も橋が落ちているため通学手段がありません。そのため一般の避難所とは別に、通学が困難な生徒が暮らす「生徒避難所」を敷地内に開設してきました。その避難所も7月31日をもって閉鎖となり、それに伴い職員の宿泊指導も終了しています。

これまで全国からさまざまな形で支援を受け、学校としてもなんとかやってきたつもりですが、ただ口を開けて支援を待っているだけではいけません。生徒にもいろいろなことを考えさせないといけないと思っています。いっぽう、避難所が閉鎖され、仮設が増えていくなか、これからどうやって生きていかなければいけないか、といった現実に直面することでしょう。

心理的な問題も多く出てくるはずです。しかし、派遣されていた心理カウンセラーは国の施策により7月いっぱいで終了し、9月からは派遣されません。そうしたことも含め、本当の勝負は2学期が始まるこれからだと思っています。

私事ですが、実家はりんご農家をしています。9月から収穫ですが、父親は風評被害を心配しています。努力の結晶である秋の実りが怖いなんて、これまで感じたこともありません。

しかし、立たなければ前に進むことはできません。今回、先生方の顔をみて少し元気になりました。それもネットワークのもつ力です。先生方の思いをつなぎながら、少しでも前に進もうと思います。

Column

岡山県・倉敷市立精思高校
定時制　教諭
野﨑拓司先生

この夏、最大のイベントだった!!

昔から注目していた酒田東高校のホームページで神戸先生の記事を読んだことをきっかけに、この会のことを知りました。今年度ようやく新規採用された私にとって、全国の先生方に出会えることは絶対にプラスになる。この機会を逃しては人生の損失だと意気込み、勇気を振り絞って「この夏最大のイベント」に参加しました。

実際2日間を過ごし、想像以上の体験をさせていただきました。いただいたものが大きすぎて消化不良にならないよう、すぐに整理したい気分です。特に、村上先生が最後に言われた「チームは自分でつくれ」という言葉が強烈でした。「待っていたら駄目。自分で一歩を踏み出せ」という意識で参加したつもりでしたが、「それではまだまだ。そこで止まらずもう一歩上に行け」と叱られているようでした。幸い、30代前半の先生方とも議論を深めることができ、その方々と連携していきたいと話していた矢先。刺激になりました。

研究会を通じて、「教師が変われば生徒も変わる。学校が変わるし、日本も変わる」という思いを強くしました。まずは自分から変えていくつもりです。

い」「大変な状況にあるが負けていない。むしろ新しいことができるチャンス」「気持ちさえあれば何でもできることを知った。俺に何ができるか」「クラス、学年、県のことだけを考えていた自分はばかだ」「国公立に何人入れたか。なんとちっぽけなことだろう」「若輩者だがあと30年かけてしっかり頑張りたい」「明日とはいわず今日から気合いを入れる」「自然科学は対象を切断し分析してコントロールする学問。それで進化を遂げてきたが、限界もある。これからは心の時代。いかにつなげ、包み込んでいくかが大切だと思う」

主催者である茅ケ崎西浜高校のある教員は「県を越えて先生方とお付き合いできる機会は実はこれまでほとんどありませんでした。2日間驚きと発見ばかりで、自分は何もしていないことにショックを受けています。いただいた熱意を少しでも生徒に生かしたい」という感想を残した。

神戸校長は次のように語る。

「今回の研究会には、高校連携、地域力の向上という大きな目的とともに、個人的にもう一つ目的がありました。茅ケ崎西浜高校職員の意識を、神奈川から全国へ向けるというものです。全国に散らばる〝平成の坂本龍馬〟の熱い志に触れ、県内の仲間に影響を与えてほしいのです」

研究会を締めたのは村上先生だ。

「先ほど、『思いをもつ者には出会いがある』という話がありましたが、そのとおりだと思います」と前置きをしたうえで、エールを込めて力強く語った。

「受信ばかりではなく、発信をしなくては。そうすれば人は自然と集まってきます。チームは自分でつくる。誰かがつくったネットワークではなく、自分がつくるくらいの気構えでやってほしい」

Report 02

全国初の高校生によるリアル熟議「高校生が考える自分たちのこと」

招待会議2011 at 慶應義塾高等学校

普段は話せない まじめなテーマを語り合う

7月24日。全国の高校球児が地方大会を闘っていた夏の日に、横浜では195名の高校生が一堂に会して議論を闘わせていた。慶應義塾高校生徒会が主催した「招待会議2011」である。

招待会議とは、神奈川県・私立慶應義塾高校で昭和33年から行われている討論会。一時中断していたが、昨年復活した。今年はそこに、文部科学省が推進するリアル熟議が組み合わさり、大規模なイベントとなった。その熱い1日をレポートする。

午前9時過ぎから、各校の制服を着た高校生が集まり始めた。会場は慶應義塾大学日吉キャンパス内にある来住舎のシンポジウムスペース。120人以上入るスペースがあっという間にいっぱいになった。この日の一般参加者は、関東の高校45校からの131人。招待会議実行委員会が約400の高校に送ったDMなどを見て集まった。全員で開会式を行ったあと、15のグループに分かれての「自由討論会」が始まった。

自由討論会では、議長が事前に設定したテーマについて、10人前後で話し合う。テーマは、「是・非　原発　アナタハドッチ？」「理想のリーダー像」といった硬派なものから「私たちが恋愛に求めるもの」「ケータイの使い方」といった身近なものまでさまざまだ。パンフレットにはそれぞれの説明もある。例えば「私の未来予想図」というテーマを掲げたグループは、「自分の将来を見つめてみませんか？　同年代の人の話を聞いたり、理想の将来図を出し合ってみたり…きっと、自分の未来予想図を考えるよいきっかけになると思います！」と呼びかける。

そのグループの話し合いをのぞいてみた。まず全員が自分の未来予想図を発表。将来の希望がはっきりしている人は約半分だった。次に就職について考えを話し合う。「自分がやりたいことを仕事にしたい」「でも収入が少なかったらダメだよね」「結婚は何歳でしたい？」「スピード婚は嫌」など、どんどん本音が出てくる。

普段、自分が悩んでいることについて、周りがどう考えているのか気になっても、まじめなことは気恥ずかしくて話題にできないという高校生も多いだろう。その分、話し合う場が与えられたらどんどん話す。ある生徒が「安定しているから公務員」と言った時は、ほかの生徒から一斉に質問や意見が出た。自分の考えが他人から

“間違った意見”なんてない。堂々とぶつけてほしい。

Outline

【主催】
慶應義塾高等学校生徒会
招待会議実行委員会
【共催】
文部科学省、慶應義塾女子高等学校生徒会
【協賛】
リアル熟議を実施する学生の会
【日程】
2011年7月24日(日)
慶應義塾大学日吉キャンパス
【プログラム】
午前中：開会式
自由討論会
午後：自由討論報告会
基調講演
金子郁容氏(慶應義塾大学教授)
主題討論会
挨拶 鈴木寛氏(前文部科学副大臣)
主題討論報告会
総括・閉会式
【参加校】
埼玉・慶應義塾志木高校、早稲田大学本庄高等学院、東京・慶應義塾女子高校、東京女学館高校、白鴎高校、早稲田大学高等学院、神奈川・鎌倉女学院高校 45校。高校生195人。うち運営役員41人、議長・書記30人
【URL】http://shotaikaigi.web.fc2.com/

自分をつきつめたら、なりたい職業が見つかるのかな。

どう見えるのか知るいい機会にもなる。最終的には、参加者全員で「他人との交流を大切にし、さまざまな経験をすることで視野を広げる。また就きたい仕事に就くために勉強する」と理想の未来をまとめていた。

ところで、グループの中心となっている議長と書記は、実行委員長の平野翔大さんが集めた。彼が校外の学生団体やイベントに参加して出会った友達で、大役を務められそうな人に頼んだという。彼らは、自由討論会のテーマを設定して呼びかけ文を書き、議論の構成をあらかじめ考えるなど万全に準備。当日も巧みに議論を引っ張っていた。

高校生が主体となる行事を教員はいかに支えるか

午後は「リアル熟議」として「主題討論会」が行われた。「熟議」とは、文部科学省が教育政策形成のために始めた取り組みで、子ども・教職員・保護者・地域などのさまざまな当事者が集まって自分たちの問題を「熟慮」「議論」し、解決を目指すもの。対面によるものは「リアル熟議」として全国で開催されているが、高校生が主体となって行うのはこれがはじめてだ。きっかけは、昨年復活した招待会議。今年はより大規模に、そして深く双方向的なものにするために、熟議の枠組みをかけ合わせた。文部科学省とのやりとりに始まり、他校への呼びかけやゲストの招待、パンフレット制作などの準備、WEBサイトの制作、そして当日の運営までほぼすべてを高校生が行った。

高校生が学校を超えた催しを行うにあたって教員はどのようにサポートしたのか。同校の生徒会顧問である宇佐見徹先生は、基本的に生徒に任せていたと言う。

「校内の教員への報告と、慶應義塾女子高校生徒会への共催の依頼は私が担当しましたが、ほかは生徒に任せました。生徒にやる気があるなら、教員は生徒のやる気を削がないようなサポートに徹したほうがいいと考えています。もっともそのさじ加減は難しいですね。今回は、『やりたい』と言われた時、それが想いだけで終わらず実現できるよう、企画書を提出させて指導を行うなどのキャッチボールは最初にしっかりと行いました」

主題討論会は、午前中の自由討論会と同じメンバーごとに輪をつくり、そこに大学生と社会人が交互に加わる形で進められた。さまざまな立場の人の発言に耳を傾けることが熟議の基本だからだ。大学生は、1年前にリアル熟議を開催した経験をもつ慶應義塾大学の学生8人。社会人は、メインゲストである文部科学副大臣（当時）の鈴木寛氏と慶應義塾大学の金子郁容教授を筆頭とした、文部科学省の熟議懇談会委員9人が参加した。

教員はサポートしすぎないこと。生徒のやる気を削がないことが大事

慶應義塾高校
生徒会顧問
宇佐見徹先生

活躍する高校生の話から自分自身を振り返る

主題討論会のテーマは「高校生から見た高校生」。甲子園やインターハイなどに出場する高校生、音楽家や俳優として有名な高校生、起業してビジネスを行う高校生など、マスコミで取り上げられるような、一見、自分と遠い世界にいるような高校生に対してどう思うか、自分はどうしていきたいかについて語り合った。

議論は40分を1クールとして、休憩をはさみながら3クールで行われた。1クールめはブレインストーミング。与えられたテーマに対して、各自が思うことを述べ、書記がそれを付箋紙に書いてホワイトボードに貼っていく。例えば、自分たちと、議題になっているような高校生は何が違うのか、というお題を立て、「才能がある」「自由な時間が少なさそう」と挙げる。ひととおり挙がったら、今度は共通点について。「高校生なんだからバカな遊びとか好きだと思う」「1日が24時間なのはみんな同じ」など。午前中に気になるテーマについて話し合った仲なので、ある程度は意見が出るが、与えられたテーマに対してどう取り組んだらいいのかわからず戸惑う姿もあった。

2クールめは、ブレインストーミングで出てきたアイデアのグループ分け。しかし、なかなか形が見えてこない。そもそも今回の「高校生から見た高校生」というテーマ設定は、実行委員が「活躍している高校生をうらやましく思うこともあるけれど、自分たちは自分たちで頑張っていこう」という意図のもとに立てたようだが、どうやら参加者は、活躍している高校生をあまりうらやましく感じていないようなのだ。だから課題を設定しづらい。それでも自分たちの日頃の意識とからめ、「自分たちは時間があるのに彼らと同じようにできないのはなぜか」「自由すぎてひとつのことをつきつめられない」と議論を進め、「授業で『自由からの逃走』という言葉を習ったが、その意味が今わかった気がする」「明

高校生で起業するってどんな感じなんだろう？

確な目標を定め、行動したい」という意見も出た。テーマに戸惑いながらも、みんなが議論にくらいつき、考えを出し合っている姿は高校生らしく、場は熱い空気に包まれた。

最後には、15のグループがそれぞれ結論をまとめあげた。その一部を紹介しよう。

「『人と自分は違うから』と思ってそこで考えるのをやめたり行動を起こさないことは問題となりうる。奮起して将来について考え、具体的なスキルを磨けば自分にとってプラスに影響する」。「有名かどうかではなく、自己満足しているかどうかという主観的な判断を行うべき」。

「高校生だけでなく日本国民が全般的に責任を避け、義務の範囲内で活動する傾向がある。責任も負えるくらいの自信をもつことでやれることが広がる」

高校生が自分たちで開催したことに意味がある

慶應義塾大学
政策・メディア研究科教授／
SFC研究所所長
金子郁容先生

自分たちで幸せを作るため議論が必要

午後の議論を終え、再びシンポジウムホールに集まった高校生たちだが、その様子は朝とはすっかり異なっていた。その姿を見た金子郁容教授は、高校生の「のびしろ」を感じたと言う。

「学校ごとではなく、議論のグループごとに座っておしゃべりしていましたよね。これだけを見ても、いい議論が行われたことがわかります。実際、議論が始まったころは話がかみ合わなかったり、意見を言うのも恐る恐るだったりといった様子が見えましたが、後半は司会者がまとめきれないほど活発に意見が出ていましたし、主催の慶應義塾高校生以外の生徒もまったく物怖じしていなかった。議論の仕方が急激に深化したのは高校生ののびしろが大きいからでしょう。グループごとに個性があり多様性が感じられたのも素晴らしかったです」

最後に鈴木寛氏による挨拶があった。鈴木氏は「大成功おめでとうございます」と祝福したうえで、高校生熟議を全国に広めたい理由を語った。

「現在の日本の高校生には、『そもそも論』が足りません。自分はどう生きるのか、私たちは今何をしなければならないのか、といった青臭い議論をどれだけ高校時代にしたのかがその後の人生を決めるのです。自問自答し、友達と、先生と、両親とそういう話をしてください」

「今はとりわけ議論が必要な時代です。戦後60年ぶり、もしくは明治維新後150年ぶりと言ってもいい。世の中が混乱するこの時代にあっては、熟議を続け、自分たちの手で幸せを実現していかなければなりません」

1日中議論した高校生たちには、鈴木氏の言葉が素直に届いたのではないだろうか。彼らの最後の集中力がまっすぐ壇上に向けられていた。

閉会式の後、外で集合写真を撮って解散となった。しかし参加者はなかなか帰らない。携帯電話を取り出して連絡先を交換したり、わいわいとおしゃべりをしたりしながらいつまでもそこにいる。夏の空も暗くなってからようやく会場を後にした。この光景は、高校の文化祭等でおなじみではあるが、文化祭と違い今日会った仲間であってもこのような時間を持てたことは、真剣に語り合った成果であろう。

現在の日本の高校生には議論が足りない“青い議論”は若者の特権だ

前文部科学副大臣／
参議院文教科学委員会委員
鈴木寛氏

Column

慶應義塾高校3年
生徒会理事・
第43代招待会議実行委員長
平野翔大氏

人を変える「議論の力」を実感できました

私は普段、社会に関する考えなどをブログに書いていますが、友達と「今の社会がどうこう」などという話はしません。周りに引かれてしまうからです。しかし、そんなことを気にせずに思いのまま話せるのが招待会議のよさです。自分の考えを人に伝え、それに対し同意や反論をされて、再度自分の考えをめぐらせる。人と話すことで自分の考えも深まります。議長たちには、事前に「参加者が怖がらず、堂々と意見を言える場にしたいから、些細な意見や突飛な意見を大事にしよう」と伝えました。実際、今年は多くの高校から多様な背景をもった高校生が集まったこともあり、参加者はいろいろな刺激を受けられたと思います。後日、「刺激を受けて意識が変わった」「会議をきっかけに新たな活動を始めた」などの感想や報告も寄せられました。あの9時間の討論から、「自分が変わるきっかけ」を手に入れた参加者がたくさんいたらいいなと思っています。

Report 03

被災地の高校生115人からのメッセージ「未来への決意」

「未来への願いを学ぶ意欲へ」仙台学習意欲シンポジウム

震災で感じた政府、マスコミへの不信感

東日本大震災で甚大な被害を受けた東北地方において、その特別な体験を未来への願いにつなげ、学ぶ意欲へと導きたい。そんな願望から電子情報通信学会がシンポジウムを開催。東北大学オープンキャンパス参加者の中から希望者を募り、115人の高校生が参加した。

まずはシンポジウム前日に仙台市内のホテルにて合宿討論会を開催。KJ法を簡略化したものについてレクチャーを受けた後、20グループに分かれ、各人が最近「気になること」をラベルに書き張り出した。ラベルの関係を整理しながら、自分と他者の考え方の違いや共通性を見出し、「自分は一人じゃない」と実感。言葉の整理を終え、いまだ多くの生徒の心を占めているのは「震災」だと判明したが、そうした討論のプロセスや各自が感じたこと、言いたいことを翌日のシンポジウムで発表した。例えば「政府への不信感」。

「政府のあいまいな対応や無責任な発言が人々の不安を煽ったのではないか」

「ライフラインの復旧が遅れたり、瓦礫処理が進まずに困っているときに、政府は首相を降ろすとか降ろさないとか話している。そんな場合じゃないだろ」

「リーダーに必要なのは努力、謙虚さ、成果と、うちのグループは意見が一致」

「マスコミや情報」に振り回されたと感じた高校生も多かった。

「原発について、結局私たちは何も知らされてなかったと思う。マスコミは本当に真実を報道しているのだろうか？」

「メディアの情報を鵜呑みにしてはいけない。自分で考え判断することが必要」

「人間」についての洞察も深まった。

「たくさんの人と避難所で生活するのは疲れるが、かといって一人きりになると寂しい。人間って矛盾している」

「CMの繰り返しがうるさいとクレームを入れる人や、日用品を買い占める人。不安が人を追い詰めるのだと思う」

亡くなった人たちの分まで生きていくのが使命

もっとも多くの高校生が気づいたものは、当たり前のものの「ありがたさ」。

「1カ月以上、水も電気も途絶え、電気が灯った時、涙が出るほどうれしかった」

「1日3食食べられることが、どれほどありがたいことかを実感」

「家族がどんなに自分を大切に思ってくれているのか初めてわかった」

高校生たちは、こうした気づきをもとに、「未来への決意」を語った。

「新しい街をつくるのは機械ではなく人。かかわる人の気持ちによって、街は良くも悪くもなると思う。もと通りではなく、前よりもっとよい街を目指したい」

「日本人はシャイだと言われるが、震災を機に私たちが中心になってどんどん意見を出し合い、シャイなイメージを払拭して新しい日本をつくりたい」

「親友を失い、まだあきらめきれない気持ちがある。でも、苦しみも悲しみも糧にして、亡くなった人たちの分まで精一杯生きる。それが私たちの使命」

企画者の東北大学 小粥幹夫特任教授は、こうした感動的な発表を受け、感想を述べた。「今回のように子どもたちが語り合えるような場や、何か活動できる機会を提供すること。それが大人たちが今後やるべきことではないでしょうか」

Outline

【主催】
電子情報通信学会　第3種研究会
「未来世代から見たコミュニケーション科学の魅力と学習意欲向上」

【共催】
東北大学　電気・情報系

【後援】
宮城県教育委員会　岩手県教育委員会
河北新報社　東京エレクトロン　河合塾ほか

【日程】
2011年7月29日（金）
東北大学　青葉山キャンパス

【プログラム】
第1部：未来世代の描く社会
～高校生グループ発表ほか
第2部：大震災から学ぶ
～講演：原島博氏（東京大学名誉教授）、本間祐一氏（総務省）
第3部：東北大学からのメッセージ
～講演：川島隆太氏（東北大学教授）、畠山力三氏（東北大学教授）ほか

【参加校】
岩手県立／大船渡高校、釜石高校、久慈高校、高田高校、福岡高校、宮古高校、宮城県立／石巻高校、気仙沼高校　ほか、高校生115人

【URL】http://saas01.netcommons.net/mogai/htdocs/